

椎名崎古墳群・人形塚古墳発掘調査概要

—人形塚古墳旧地表面上の地割線について—

笹 生 衛

1. はじめに

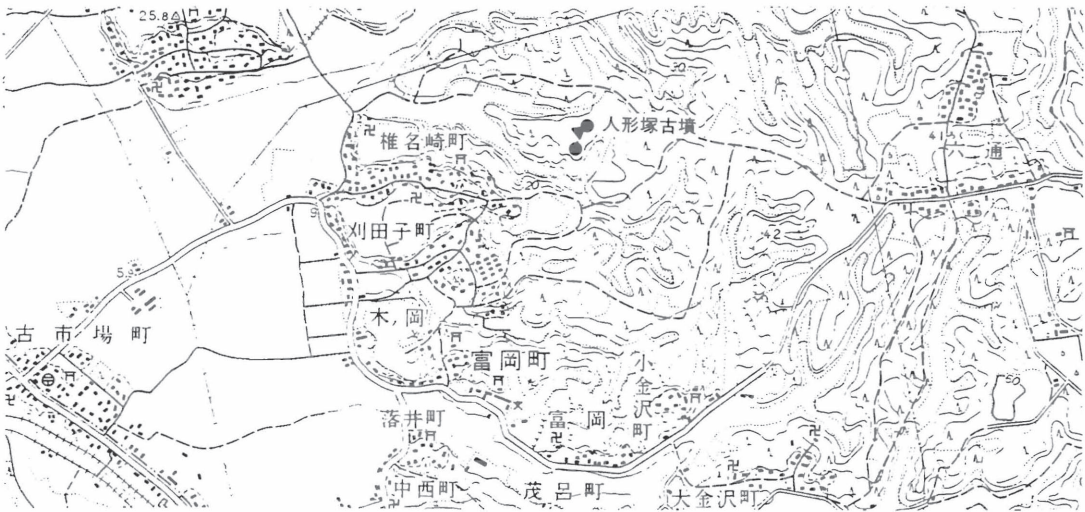
昭和61年4月から62年3月にかけて、千葉市椎名崎古墳群中の人形塚古墳とそれに近接する円墳の発掘調査が実施された。その結果、人形塚古墳は二段築成の墳丘で長方形の二重周溝を伴う前方後円墳であることが判明し、墳丘下、旧地表面上では墳丘築造時に引かれたと思われる地割線を検出した。中でも地割線は、後に詳述するように古墳築造時の企画性を考える上で重要な資料となる可能性が考えられる。そこで、ここでは人形塚古墳の発掘概要の報告を兼ねて、この地割線の資料紹介を行うこととしたい。ただし、発掘調査直後で発掘資料について未整理の状況である現段階においては、地割線についての細かな考察はさけ、今回は発掘概要と地割線の検出状況を述べ、それについて若干の所見を記するに留めておくこととしたい。

2. 人形塚古墳の発掘概要

今回、地割線を検出した人形塚古墳は、村田川

下流域の北岸台地上に形成された椎名崎古墳群中の前方後円墳で、明治年間に武人埴輪が出土したことにより、その名が付けられている(註1)。また、本墳は椎名崎古墳群中で、現時点で埴輪の存在が確認されている唯一の古墳であり、群中でも特異な存在であると言える。

人形塚古墳は、標高35mほどの尾根上に立地し、主軸を北東方向にとり、前方部が南西方向に面する前方後円墳である。墳丘は、北西側括れ部付近から前方部にかけて耕作による改変を受けている。他は、旧状をよく留めており、保存状況は全体的に良好であった。表土除去の結果、墳丘の本来の形状は後円部及び前方部両側面にテラスを持つ二段築成であり、長方形の二重周溝を伴っていることが判明した。墳丘規模は、表土除去段階で、墳丘主軸長41m、後円部径25m、前方部幅30mを各々計る。また、墳丘のトップレベルは、後円部で標高38.80m、前方部で標高39.20mを計り、前方部は後円部よりも0.4m高い。周溝は、内外共に長方形を呈しているが、墳丘を全周せず、前方



第1図 遺跡位置図 (1/25,000蘇我NI-54-19-15-2)

部前面両端部付近と後円部石室付近は、ブリッジ状に分断されている。ただし、墳丘南東側の外側周溝は、地形に制約されて当初より掘られなかった可能性が高い。なお、外周溝を含めた墳丘規模(兆域)は、周溝検出面で、縦63m、横45mを計測する。

墳丘の築造については、墳丘の切断調査により次のように推定できる。まず、旧地表、黒色土層(II a層)上面をある程度整地した後、周溝を掘り込み、後円部上段墳丘を丁寧な版築により築造する。続いて、ハードロームブロックを中心とする盛土を使い、後円部に比べるとやや雑な盛り方で前方部を築いている。この盛土作業で築かれた部分は、二段築成の墳丘中でも、主に上段部分であり、下段部分(テラス以下の部分)は、テラス上に厚さ約20m前後で盛土する以外は、殆どII a層以下の地山整形によっている。

次に、この古墳を特徴付ける埴輪について見ておこう。埴輪は墳丘上及び内外周溝中から多量に出土したが、全体的に遺存状態は悪く、原位置を留めるものや直接原形を窺える例は非常に少ない。このため、埴輪の並び方や細かな形状・年代等については今後の整理作業を待たなければならない。しかし、埴輪については、発掘作業の過程において明らかになった特徴として以下のような点を指摘できる。

まず、埴輪には円筒・朝顔形・形象の区別があり、形象には人物・馬の存在が確認できる。円筒、朝顔形埴輪の焼成は、総体的に良好で、中には還元焼成される例も認められる。また、形象埴輪においては、朱彩が多用される点も特徴と言える。

埴輪片の分布状況を見ると、円筒埴輪は墳丘全域、中でもテラス上と周溝内に濃厚な分布を示すようであり、これに対し形象埴輪は、墳丘南東側括れ部付近テラス上、そしてその下の周溝内に濃厚な分布範囲が限定されるようである。上述したことから、人形塚古墳においては、円筒埴輪がテラス上に立て巡らされ、墳丘南東側テラス上で括れ部を中心とする場所に形象埴輪が並べられるという状況を、おぼろげながら推定することが可能である。なお、埴輪の年代については現段階で速断すべきではなからうが、円筒埴輪のタガの

断面形等の特徴から6世紀後半の年代を一応推定しておきたい(註2)。

では、引き続き内部主体と出土遺物について触れておこう。内部主体としては、横穴式石室及び箱式石棺が検出されている。

横穴式石室は、後円部東南側テラス部分に構築されており、軟質砂岩截石積による。前庭部は、内側周溝がブリッジ状に分断される部分に掘り込まれており、更にそこから南側丘陵斜面にかけて溝状の墓道が存在する。出土遺物には、直刀14本を始めとして、銀製刀装具、鉄鍔多数、玉類、須恵器片、人骨、馬歯がある。

箱式石棺は、東南側括れ部周溝中に、絹雲母片岩を使用して構築されている。出土遺物には、直刀1本、刀子2本、鉄鍔多数、人歯がある。

以上の出土遺物の年代については、須恵器の中に7世紀代に降る例が認められ(註3)、人形塚古墳の内部主体の使用年代は、追葬も含めて7世紀前半代に及ぶものと考えられる。

3. 旧地表面上の地割線

ここで紹介する地割線は、幅約20cm、深さ3~7cmほどの、断面「U」字形を呈する浅い溝状遺構で、人形塚古墳々丘下旧地表面上(II a層上面)で検出された。

まず、地割線の平面形を見ると、後円部中央に径14mの正円が認められ、更に両側の括れ部を結ぶように弧状の線が存在する。前方部においては、前方部両側面から約6.5mほど内側に入った部分に、側面にそって北東側では17.2mの、南東側では10mの直線が、それぞれ断続的に検出されている。また、北東側直線の内側にそって11mのゆるやかな弧状の線が、南東側直線の外側には2mの直線が、各々確認されている。前方部における地割線の起点は、後円部内側の正円(径14m)の付近であり、何れも内側正円内部にまでは達しない点で共通する。

では次に、これらの地割線を墳丘平面図と墳丘セクションと比較して、この地割線の機能について若干の所見を記しておきたい。

墳丘平面図と地割線平面形との比較を行ってみると、以下の3点の整合性を認めることが可能である。



第2図 人形塚古墳地割線検出状況

- ①後円部における径14mの正円をなす地割線は後円部上段墳丘径と一致する。
- ②両側のくびれ部を結ぶように引かれた弧状の線は、後円部下段墳丘の外周線と一致する。そして、その弧から中心を求め、円を復元すると、内側の径14mの正円と同心で径25mのほぼ正円となる。
- ③前方部両側面にそって走る直線状の地割線は前方部上段墳丘の上端部稜線と一致する。続いて、墳丘主軸セクションと比較してみると後円部上段墳丘の版築範囲と径14mの正円とがほ

ぼ一致している。

また、地割線は断面「U」字形の溝状遺構であることは前述したが、その覆土は殆どが、旧地表面直上の盛土と同様のソフトロームである。そして、墳丘盛土最下層の土と地割線覆土とを分別することは不可能であった。これは、旧地表面上に引かれた地割線が、墳丘盛土作業中に盛土によって埋められていったことを示している。

上述したような地割線と墳丘との整合性や地割線覆土の特徴から、墳丘築造の上で地割線の果たした機能は次のごとく考えることができる。ま

ず、後円部における径14mと径25mの同心円状の地割線であるが、内側の径14mの円は後円部上段墳丘の版築盛土範囲を指示するものであり、その外側の25mの円は後円部下段墳丘径及び後円部周溝の掘り込み範囲を指示していると考えられる。前方部における直線もしくは弧状を呈する地割線についても、後円部内側の円形のものと同様に、前方部上段墳丘の盛土作業と密接な関係があることは間違いないと思われる。そして、更に、後円部における地割線のあり方から考えて、前方部側面や前方部幅の設定、長方形二重周溝の掘り込みについても、墳丘下に見られたような地割線によったと推定でき、それは周溝の掘り込み作業中に消滅したと推測される。

4. おわりに

以上、人形塚古墳の発掘概要を述べると同時に墳丘下の地割線について資料紹介を行った。最後に、この地割線について今後の問題を述べてまとめとしておきたい。

前節で見たように、旧地表面上で検出した地割線は、墳丘の盛土及び周溝掘り込みの範囲を指示・設定するために旧地表面上に施されたものである可能性が高い。このような意味で、この地割線は古墳築造企画を考える上で重要な資料となることは言うまでもないであろう。

古墳々丘の築造企画や使用尺度については、今までに上田宏範氏や梶国男氏を始めとして多くの研究があるが(註4)、何れの研究も現状の墳丘実測図を基礎資料としている。このため、墳丘築造企画や使用尺度の復元については、少なからず誤差を含んだ形で研究が進められてきた。ところがこの地割線からは、部分的ながらも古墳築造時に意図された形態と規模を知ることができた。特に、使用尺度については、後円部の同心円状の地割線から割り出すことが可能であると思われる。つまり、同心円は、円という完結した図形の重なったものであり、この2個の円が何らかの単位を基準として描かれているとすれば、2個の円の径の公約数が、その基礎単位として考えられはしないだろうか。ここでは、内側の円が径14m、外側の円が径25mと復元されている。2個の円の径の公約数の中で最も切りのよい数に $0.25\text{m}=25\text{cm}$ があり、

この25cmを後円部地割線の基礎単位として考えることができるのかもしれない(註5)。しかし、基礎単位の問題については、本古墳の例だけから結論付けるのは性急に過ぎると言え、今後、同様な資料の蓄積を待って地域的・年代的な分析を行う必要がある。

このことは、古墳築造企画の問題についても同様である。本古墳の地割線は、古墳築造時の意図が強く反映されてはいるが、前述したように、その主な機能は墳丘の盛土範囲と周溝掘り込み範囲の指示にあった可能性が高い。そのため、この地割線は、墳丘形態の企画設計を直接示したものであるとは、直ちに言い難い性格をも備えていると考えられる。よって、本古墳の地割線については、今後のこの種の資料の蓄積を待ち、その性格の検討を行い、その後に古墳々丘の企画設計復元のための資料として活用されるべきであろうと考えている。

何れにしろ、今後の本古墳の資料整理作業の成果と同種の資料の蓄積が待たれる所である。

補註・参考文献

- 1) 千葉市史編纂委員会『千葉市史』史料編1
千葉市 1971年
- 2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」考古学雑誌64-2
1978
- 3) 人形塚古墳の石室周辺や墓道覆土内からは、須恵器の大甕や長頸瓶の破片が出土している。その中には所謂「フラスコ型長頸瓶」と呼ばれるものも認められる。
- 4) 上田宏範『前方後円墳』学生社 1969年
梶 国男『古墳の設計』築地書房 1975年
以上の他に、甘粕健、小沢一雅、石部正志、宮川徒、平田信芳の各氏の研究が知られている。
- 5) ここで示した25cmという数は、西晋尺～宋・梁尺の大陸尺に近似しており、これらの大陸尺との関連が考えられる。しかし、類例が他に認められない現段階では、その可能性を指摘するに留めておきたい。大陸尺については、梶国男前掲書による。

(2班 千葉東南部事務所)